

事業名

みずから考える水の大切さ ～災害時のために～

実施団体

待賢まちづくり委員会

事業概要

待賢学区に住む方に災害が起きた時に最も必要とされるであろう「水」の大切さについて、普段からどのように備えていたらいのかを学び、日頃から水を備蓄する意識を浸透させるために、4回のイベントを行い、このイベントに参加することで待賢学区のコミュニティの輪を広げ、実際に災害に直面した時に協力して「水」を確保できる地域力の高い学区になることを期待しています。

第1回「災害時に必要なもの、 普段使う水を知ろう」

災害時に必要なものを宝探しゲーム形式で学び、その中でも大切なのは「水」ということを知ってもらいました。また、普段はどれくらいの水を使っているのかを実際に体験しながら学びました。備蓄に関する情報を模造紙にまとめ展示しました。

第2回「家族が1日生きるために どれくらいの水がいるのだら う？」

家族が1日生きるためにどれくらい水がいるのかをクイズ形式にして学びました。子供たちも積極的に発言し、楽しんでくれました。他にも水を備蓄していない場合の大変さを知るために、1人5リットルを持ち階段を上り下りする体験をしました。



第3回「家族で知ろう、水の備蓄の大切さ」&まとめイベント

第3回は、前回の内容に引き続き、家族で水の備蓄に関する知識や役に立つ豆知識などを〇×クイズ形式で行いました。他にも水の代用品になるアイテムを使ったビンゴを行い代用アイテムの使い方を体験しながら学びました。そして同日にまとめイベントとして、今まで行ってきたイベントと豆知識を5ページ編成の本にまとめ配布しました。そしてその本を使い、復習を行いました。

まとめ

この事業は、待賢学区にお住まいの方々に「水の備蓄」の大切さを知っていただき、水を備蓄する過程を1件でも増やすことを目的に、「学び」の中に「楽しさ」「体験」の要素を取り入れた活動を行ってきました。ターゲットが子供という中でこの内容は少し難しいかと思われましたが、子供たちはしっかり話を聞いてくれ、イベントにも取り組んでくれた印象があります。保護者の方にもサポートをしていただき、子供からは「備蓄を知れた。大事だと思った。」や、保護者の方からは「家族で備蓄について話し合う機会を作りたい。」「早速備蓄を始めました」などの言葉をいただき、少なからず備蓄への関心を高められたのではないかと思います。今後もこの事業がきっかけで、待賢学区の家庭でさらに水を備蓄する家庭が増えていき、実際に災害が起きても対応する備えができていく家庭が増えることを期待します。

宮城県石巻市視察

災害は「もしも」じゃなくて「いつも」起きるもの

○石巻市役所にてヒアリング

石巻市千石町町内会長岩崎様に震災当時のお話を聞くことができました。
千石町は石巻市役所近くであり183世帯350人が暮らす町で、子どもが少なく70歳以上の高齢者が全体の3割となっています。

・震災前の取り組み

平成18年 5班編成の自主防災組織を設置。要援護者対策にも注力。
平成22年に防災教室を開き、地震や防災知識について伝える。

・震災当時の状況

震災直後は町内会長が住民の安否確認を行って回った。自宅、市役所、近くのホテル等で数日の間避難生活を送った人が多かった。東修大学に自衛隊基地があり、基地に行けば水や食料をもらうことができた。

・岩崎町内会長の考え

- ①高齢者の多い地域では普段から要援護者対策が必要である。
- ②個別で避難訓練を行い、日々防災意識を高めておくべきである。

